

## 国際情勢を読み解く ②

オーストラリア

# ギラード新政権は任期を満了でききるか

獨協大学教授

永野 隆行

（オーストラリアで70年ぶりとなる少数政権が誕生）

2010年はオーストラリア政治にとつて異例づくめの1年だった。

6月には、ケヴィン・ラッド首相

が辞任に追い込まれ、ジュリア・ギ

ラード副首相が彼の後を継いだ。日

本とは違い、議会の任期途中での首

相交代は、極めて異例のことである。

「オーストラリア史上初の女性首相、

もしくは初の赤毛の首相、どちらが

大きな話題になるかしら」と、就任

直後の記者会見でギラードはおどけ

て見せたように、その気さくな人柄で支持率の低迷する労働党の救世主と見られていた。

しかし8月21日に行われた上下両

院の連邦議会選挙では、下院で労働

党と野党保守系連合（自由党と国民

党）の勢力が拮抗し、どちらの政党

も過半数議席を獲得できない、いわ

ゆる「ハング・パラメント（中ぶ

らりん議会）」となった。実に70年ぶ

りの事態である。いわゆる「無効票」

が大量に出たことも異例であった。また、上院で一定程度の議席を保有してきた緑の党（グリーンズ）が下

院で初の議席を獲得している。

労働党による政権の維持か、野党

勢力による政権の奪取か。地方・内

陸部出身の無所属議員3人の支持獲

得をめぐって、与野党の激しい綱引

きが展開された。メディアは連日、無

所属議員の動向を伝え、彼らの行く

ところすべてにメディアが押し寄せ



た。そして過熱気味の報道に国民の嫌気が差し始めたであろうどころ、3人の無所属議員らが態度を表明し、労働党による少数与党政権が誕生した。新政権誕生まで実に2週間以上の時間がかかっていた。

### 地球温暖化対策と与野党党首の交代

今回の選挙は、与野党両党首が迎える初めての選挙であった。前回の2007年末の選挙から両党とも党首が代わっており、今回の選挙で勝利を収めることは、自らに対する国民の信任を得て、党内基盤を固める重要な機会になると見られていた。両党党首の交代には、ともに地球環境問題が絡む。自由党では政府が打ち出した「排出権取引制度（ETS）」を支持していたマルコム・ターンプル党首が、同制度導入を強硬に反対するトニー・アボット氏ら党内

右派の追い落としに遭い、2009年12月の党首選で破れている。

労働党でも、ラッド首相が「最大の道義的挑戦」と呼んだ地球環境問題への取り組みが遅々として進まず、国民の支持を急速に失っていった。

温暖化対策かつ景気刺激策として政府が導入した住宅への断熱材設置に対する補助金制度では、悪徳業者による手抜き工事の原因で火災などのトラブルが多発し、国民の不評を買った。ETSの導入についても、上下両院が「ねじれ現象」を起こしている中で、法案は三たび（2009年8月・12月、2010年2月）否決され、導入を凍結せざるを得なくなった。同制度導入をてこに、コペンハーゲンのCOP15（2009年12月）で温暖化ガス排出削減の国際合意形成を実現しようとしていた

ラッドのシナリオは崩れ、国民の労働党政権への失望感が高まっていった。

こうした動きは、支持率の低下として如実に現れた。6月初旬に行ったフェアファックス系紙によるニールセン世論調査では、2大政党の2党択一で労働党が47%、保守系連合が53%を獲得し、およそ1カ月前の結果、50対50の状態よりもさらに悪化していた。またラッド政権が打ち出した鉱物資源に対する「資源超過利潤税」は、鉱山業界から激しい反発に遭い、「資源州」といわれるクイーンズランド、西オーストラリア州での労働党支持率の急落をもたらししていた。

このような中で労働党内では年内には実施されるであろう連邦議会選挙をにらんで、党首交代によって事

態を開示しようという雰囲気が高まっていた。ラッドの政権運営に対する党内の批判のうねりと相まって、彼はとうとう6月に辞任に追い込まれたのである。

### 中ぶらりん議会の誕生へ

ギラード首相は7月17日、連邦議会選挙を8月21日に行うことを発表した。初の女性首相の誕生で国民の期待を集めていたが、この「ギラード効果」がいつまでも続かないことは明らかであり、選挙戦を有利に展開するためにできる限り早期に実施することが望ましかった。首相交代直後の主要紙による世論調査では、労働党支持率が持ち直し、2党択一でも労働党が数ポイントの差で保守系連合をリードしていた。

しかし選挙が近づくにつれ、労働党の優位は失われていく。7月下旬

（8月上旬に行われたニューズ・リミテッド系紙によるニュースポル世論調査では与野党ともに支持率が50%となり、まさに互角の勝負となっていた。これにはもちろん「ギラード効果」の勢いがなくなつたこ

ともあるが、野党による与党攻撃が功を奏した面もあった。ラッドからギラードへの党首交代が、労働党内の「顔の見えない」実力者たちによって密室で決められたとの非難は特に効果的であった。またラッド政権当時のギラード副首相の閣議での発言内容が暴露され、野党側は「ギラードの勝利を望まないラッド陣営によるリーク」であることを強調して党内不和を印象付け、国民の労働党に対するイメージをいっそう悪化させることに成功した。多くのメディアが予想していなかったアポット率い

る保守系連合の善戦は、与党に対するこうしたネガティブ・キャンペーンが功を奏した結果といえる。

結果は予想をはるかに超える与野党勢力伯仲であった。同じ議院内閣制をとるイギリスが5月に経験した「中ぶらりん議会」の誕生である。労働党の獲得議席が72に対して保守系連合は73で、いずれも総議席数150の過半数76を獲得できなかった。多数与党の単独政権による強い政府が不可能となつたのである。2大政党制のもと安定した政権運営に慣れていた国民の不安を打ち消すかのようには、メディアでは少数与党政権のメリットを強調する論調が目立ち始めた。議院内閣制を採用する主要国（イギリス、カナダ、ニュージーランドなど）はすべて連立政権であること、さらに州レベル（西オーストラ

リア州)ではすでに連立政権が存在し機能していることを指摘し、また強い政府の存在によって議会の存在がこれまで軽視されてきたことを振り返り、少数与党によって議会が復権することに期待を寄せた。

その後、与野党による「多数派工作」が17日間繰り広げられ、まさに政治が劇場と化した。「3人の仲間たち(スリー・アミーゴズ)」と呼ばれた無所属議員たちは、「安定した政府」のためには3人がまとまっていずれかの政党と協力することが重要だと述べたが、個別に行動するよりもまとまった方が自分たちの存在価値を最大限に高めることができる考えたからである。彼らは与野党に対して議会改革をはじめとした政権協力のための7つの条件を突き付け、またこれまでに軽視されてきた地方・

内陸部の権利の尊重を訴えた。

最終的には無所属議員のうち1人が保守系連合を、ほか2人が労働党を支持する意思を表明した。また下院にただ一つ議席を持つグリーンズ議員、さらにグリーンズ系の無所属議員も労働党を支持する姿勢を示したことで、労働党勢力76、保守系連合勢力74となり、労働党政権の存続が決まった。

政権発足後、メディアの関心はこの議会が任期3年を満了できるのかどうかへと移っていった。無所属系議員との協力はいわゆる連立合意ではなく、ギラード政権を信任し、予算案には賛成票を投じるのみで、その他の個別法案に対しては是々非々でいくというものである。従って今後、無所属系議員もしくは与党内のバックベンチ議員を含めて、ごく少

数の議員の造反が政権の命運を大きく左右することになる。

### 労働党敗北の要因

労働党は辛うじて政権を守ったものの、単独過半数をとれなかったばかりか、現有議席の2割近く(16議席)も失ったのであり、選挙戦で敗北したことは明らかである。ただし一般に有権者の判断を大きく左右するとされる経済運営という点では、労働党政権への評価は決して低いものではなく、負けるべくして負けた選挙ではなかった。多くの国があらゆる策を講じて景気浮揚を目指す中、オーストラリア経済は景気後退を逃れ、実質国内総生産(GDP)もプラス成長を続けている。また財政赤字もGDP比約6%に過ぎず、先進国の中でも最低水準となっている。こうした経済状況にもかかわらず、

労働党は苦戦を強いられたのである。

労働党は選挙戦の始まりから終わりまで、経済運営の実績を前面に押し出すことができなかった。保守系連合側は、ギリシャの財政危機を例に挙げて、財政赤字に対する国民の不安を増幅し、与党労働党の財政を「ばらまき」であると激しく批判した。その批判のやり玉に挙げられたのが「全国高速ブロードバンド・ネットワーク（NBN）整備計画」であった。野党勢力は「節約」や「無駄の徹底的削減」を訴え、労働党側を最終防戦に追いやることに成功した。選挙前には票集めのために予算を大盤振る舞いすることがよくあるが、経済運営能力が争点になっている以上、労働党は政権与党としての特権を行使できなかったのである。

またギラード政権での不法移民対

策の転換も、労働党支持率に大きく

影響したと言えよう。例えばこれまで労働党の牙城といわれてきたシドニー近郊のカブラマッタやケンプシーなど、アジア系移民が多く居住する地区では労働党が軒並み得票数を激減させている。国全体での労働党から保守系連合への得票数の変動は約2・6%であったのに対し、ニューサウスウェールズ州では約4・8%、さらにカブラマッタでは約23%にも上っていた。移民たちの多くは、労働党は移民に理解を示すラッドを放逐したばかりでなく、ギラード首相のもとラッド政権での融和的な移民政策を抜本的に転換しようとしていると感じた。こうした労働党にアジア系移民たちは見切りを付けたのである。また同様の観点から、都市部の中間層もギラードの断

固たる不法移民対策に違和感を感じ、

温暖化対策の遅れへの不満も影響して、労働党からグリーンズ支持へと流れていった。

### ギラード新政権の今後

ギラードは9月14日、ブライス連邦総督を前に宣誓し、第27代首相に任命された。新政権ではラッドが外相に就任する一方、ラッド失脚に暗躍したとされる「顔の見えない」党内実力者らも入閣を果たし、野党からの激しい批判を浴びた。特にラッドの入閣に関しては、彼が党首を辞任した直後にギラードとの間で密約が交わされていたとのうわさがあつた。ギラードはラッドからの選挙協力を得る見返りに、閣僚の重要ポストを用意するとの言質を与えたというのである。密約がなかったとしても、党内融和を内外に印象付ける意

図があったとされ、多くの国民もラッドの起用については疑問符を付けている。さらに具体的な外交案件でもギラードとラッドでは考え方の違いがあるといわれており、独断専行型のラッド外相が、閣内の融和を保ちつつ政府見解に従った行動をとれるかどうか、大きな関心事である。

ラッドは外相就任直後に早くもニューヨークに飛んで、国連で演説を行い、また各国外相との会談を精力的にこなした。それとは対照的にASEM首脳会議のためブリュッセルを訪問していたギラードは「私は外交には熱意を持っていない。政治の世界に入ったのは外交以外の分野への関心からだ」とインタビュウで答えている。外交に経験も関心もないギラード、とのメディア評を自らが認めることとなった。

しかし、ギラードがたとえ外交に関心があったとしても、それに時間を割く余裕はないかもしれない。9月末に開会した連邦議会では、少数与党政権の運営がいかに難しいかを象徴する出来事が早くも起こっていた。野党側が提出した議会改革関連法修正案の採決にあたり、賛成73、反対72で野党修正案が可決され、政府与党がわずかに1票差で負ける事態となった。少数与党である限り、こうした事態は今後も繰り返されるであろう。また党所属議員が1人でも辞職し、補選でもあれば、政局は一気に流動化することもある。

さらに気になるのが議会におけるグリーンズの台頭である。労働党とグリーンズ両党は選挙直後に政権運営で協力することに合意した。グリーンズは今回の上院選挙で議席を

9に伸ばした結果、2大政党がともに過半数を持たない上院でキャスティングボートを握る。「世界で最も強力な上院の一つ」と呼ばれるオーストラリア上院は、あらゆる法案の通過を阻止し、修正を加える大きな権限を持っている。選挙結果が上院の議席に反映されるのは来年7月であるが、地球温暖化対策、アフガニスタン派兵、難民対策、人権・民主化など、両党で意見が食い違う問題は多くあり、ギラード政権がどう対応をしていくかに注目が集まる。グリーンズとの協力で、労働党が左傾化することを警戒する見方もある。いずれにせよ、政局の行き詰まりから、任期満了を待たずに議会が早期に解散される可能性も否定できないだろう。

(ながのたかゆき)